
Lose sight of road

風哭大吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o s e s i g h t o f r o a d

【Nコード】

N 2 4 1 8 C

【作者名】

風哭大吾

【あらすじ】

少女の記憶を取り戻すため、主人公が奮闘する物語。

プロローグ（前書き）

初めての作品です。

多々至らぬ点があると思いますが頑張っていきたいです。

プロローグ

「おいでなさい……」

誰だ、あんたは。

「おいでなさい……試されし者よ……」

試されし者？

「私はあなたに道標を与えましょう……それを手に、さあ……」
道標？

「おいでなさい……守るために……或いは壊すために……」

さつきから何訳の分からないこと言ってるんだ？

「おいでなさい……おいでなさい……始まりの時は近い……」

待てよ、あんたは誰だ！

「……………」

時は西暦20XX年。

日本のある町に住む俺

氷渡 流は、夜中に突然、ベッドの

上で跳ね起きた。

「夢……か……………」

夢にしてはいやにリアルだったな。

何かに呼ばれている夢。

今自分がベッドの上になかったら、夢だと分からなかったかもし
れないような。

「ま、疲れてるのか。二度寝二度寝と。」

俺は再びベッドに身を横たえると、瞬く間に眠りについた。

それが何を告げるものかも知らずに……

第一話

「流々、そろそろ起きたほうがいいんじゃない？」

母さんか…でもまだ起きたくねえな。

「もう8時20分前よ。学校、遅刻したいの？」

ちよっ…8時20分？それはマズイぞ！始業式は8時30分からだ！

「朝ごはんは？」

「食ってる暇無いつての！」

(もうちよつと早く声かけてくれたっていいじゃねーかよ…)

母さん…良子はちよつと暢気すぎるところがある。

ついこの間も、天ぷら鍋が炎を上げはじめたつてのに、

「アツアツで美味しそうね。」とか言ってたしな。つかこの家後何年保つんだ？

超スピードで支度を終え、靴を履くと、母さんの「いつてらっしや〜い」という間の抜けた声を背で受け、ドアを蹴り開けて表に飛び出した。

此処から学校まで徒歩約15分。走ればなんとか間に合うかもしれない。な。

「和也さんと真は遅刻なんてしないのにね。」

息子を見送った良子はそんなことを呟きながら、家の掃除を開始した。

「っしや！この時間なら…！！」

俺は通学路を疾走しながら、残りの距離と今の速さから間に合うかどうかを計算していた。

(アクシデントでも発生しない限りは間に合う…)
とか考えてるときはっか、アクシデントは起こる。

案の定、学校前の最後の曲がり角でそれは起こりやがった。
しかも想像しえない形で、だ。

突然視界内に現れたのは、目の前でバッグを振り回しながら歩いている女子生徒。

とつさに避けようとはしたが、人間の反射神経にも限界はある。

「ふぎやつ！」

猫みたいな声をあげると、俺はその場にひっくり返った。

「あ、ゴツメ〜ン。当たっちゃった。(笑)」

「(笑)じゃねええええ!!」

ふざけた謝り方をした女子生徒：白峰 楓は、

「あはは、あたし新学期早々遅刻って嫌だから、先行くね〜」

笑いながら校門へと走っていつちまった。

「白峰のヤロー…って急げ急げー！」

あいつへの制裁の前に、差し迫る事態を避けねえとな。

俺は校舎へと、夢の無遅刻を賭けたラストスパートをかけた。

第二話

「……………」
「……………」

よお、流だ。

今俺は、新学期早々遅刻の罪で廊下に立たされている。

え？なんで無言が二つあるのかって？そりゃもう一人遅刻がいるからだ。

え？なんでお前は両手にバケツ持つてるのかって？

まあ少し回想させてもらおうとだな。

『キーンコーンカーンコーン……………（チャイム鳴り終わり）』

『よーしみんな席に着け』

着席後20秒経過。

『ガラガラガラ！（ドアを開ける音）おはようございます！』

『白峰エ！チャイム鳴って20秒経ってるぞ！遅刻罪で廊下に立ってろ！』

『そんなあ、先生これには事情が…』

『問 答 無 用 だ！』

さらに15秒後。

（あいつ立たされてるじゃねーか、ハハハ！それがお前の業だ！）

『スルスルスル…（ドアを開ける音）そ〜〜…（怪しげな効果音）

『氷渡……よもや遅刻を免れようとは思ってないな？』

『あ…バれてました？（冷や汗）』

『廊下行ってこい。バケツに水汲んでな。』

というプロセスを経て今に至るワケだ。

何？格好悪いって？言うな、傷つくから。

「…流のせいだからね。これ。」

「お前がバグぐぶん回してたのが問題だろ。」

「いや、流が寝坊したのが悪い。あたしいつものところで待ってたのに。」

「一緒に行つてれば遅刻はしなかったと思うね、あたしは。」

「一緒に行こうと頼んだ覚えはねーし、頼まれて承諾した覚えもねーぞ俺は。」

「つか名前で呼ぶのはやめろって何度も言ってるだろが。」

「なんで？流を流つて呼ぶことの何がいけないの？」

「馴れ馴れしい！」

「いつのまにか責任のなすりつけ合いから会話が飛んでやがるな。飛ばしたのは俺だが」

結局この状況は改善されないワケだ。

「キーンコーンカーンコーン……」

！ 解放の時間だ！

すぐさまバケツの水を捨てに行つた俺の耳に、

「氷渡、白峰、お前らは放課後残つて教室掃除をしていけ。」

担任の無情な言葉が飛び込んできた。勘弁してくれよ……。

この学校における遅刻はそこまで罪が重いのか？

「え〜！」

「何か言いたいことがあるのか？」

「いえ、なんでもありません。」

白峰の非難も、一言で虚しい抵抗に変わってるしな。

くそっ、こいつと二人で残り掃除か。監視が居るんじゃないか。えな。

「はあ……」

俺は恐らく今日何回もするだろう、大きなため息をついた。

その日の放課後。

「どっちが雑巾やるかジャンケンしない？」

「自ら負け確定の勝負を挑むとは愚かだな。」

「そういうのは勝つてから言つてよね。いくよ！ジャンケン！」

「あゝもう、面倒くさいなあ。」

「言ってる暇があつたら手と足動かせ。もうすぐ終わりだろ？」

なんで俺より早くお前がダレ気味になつてんだ。

まあ箒より雑巾の方が疲れるとは思うけどな。

勝負に負けた奴が悪い。

「女の子に水仕事をさせるなんて！酷すぎじゃない!？」

「ジャンケンで決めるつつたのはお前だろ。」

「それにしたつてわざと負けてくれるとか、そういう心遣いないの？」

「んな生温かそんなもんは持ち合わせてねーよ…っってもう終わりじやねーか。」

「あ、じゃああたしもう帰るね！」

「おい！後片付け」

「よろしく！」

最後まで言わせねえ内に脱出しやがった。

しかも雑巾放り投げて埃散らかしてつたしな。

これだから女子は困る。なんでもかんでもやり方がずさんなんだよな。あ、偏見か？

「ちつ…しゃーねーな。」

俺は埃まみれになつた一部の床を掃くと、箒と雑巾を掃除用具入れに投げ入れ、

教室を後にした。

第三話

「たでーまゝ…。」

「あ、兄貴お帰り。」

「流、遅かったな。」

疲労困憊で帰宅した俺を、リビングで父さんと弟…和也と真が出迎えた。

途中寄り道してきたしな。時計はすでに6時を回ってる。

二人はテレビを見ていたらしい。

「動物園の人気者、コアラのコー君は、なんとたわしでものを磨けるんです！」

とかいう字幕が流れている…。ってかなんだこの番組。

「その顔は、学校で残り掃除をやらされた顔だな？」

「なんで父さんにはそういうことが分かるんだよ…。」

父さんはときたま変なことで頭を働かせるんだよな。

「分かるのは”そういうこと”だけじゃないぞ？」

ソファの上で”頭の良い男”を自分なりに表現した顔で父さんが言った。

「普段のお前なら適当にサボって帰ってくるはずだ。

だが今日は真面目にやってきたらしい。つまり他に誰かいたということだ。」

「普通の子ならお前と残されることは殆どない。

お前は誰かをつるんで悪さするタイプじゃないからな。が、何故かしらアクシデントが

起こりやすい相手がお前にはいる。それは誰か？」

「何だよ、その気味の悪い笑い顔。」

筋が通ってるんだか通ってないんだか分からないことを一くさり述べた後、父さんはこう締めくくった。

「結論を言っとだ。流、お前楓ちゃんと二人きりで残り掃除しただろ？」

一瞬の間が空いた。

「ブツ！ゲホツゲホツ…兄貴…流石…」

真が飲んでた紅茶を吹き出しやがった…って何だそのリアクションは！

「ちょっと待て！確かに俺はあいつと二人で残り掃除したけど、それがなんだってんだ！」

「いや別にどうということもないが…なあ真？」

「そうそう、兄貴が何したって俺は何も言わないよ。青春だもの。何みつおさん気取ってやがる！つか青春とか言うな！」

「ほらほら二人とも、流をからかうのは止めなさいって。流だって本気なのよ？」

やっと母さんが止めに入ってくれた…っておい。

「母さんまで何言ってるんだ！」

駄目だ、頭が痛くなる。このやりとりは。

「大丈夫よ流。あなた達のことは宗太も紅葉も了承済みなんだから。」

（あの人達は一体何を了承してるんだ！？）

宗太と紅葉つてのは白峰家の両親だ。

俺の両親とは同じ高校…今俺が通ってる”ひがしやねーぞ東高校”の同級生だったらしい。

のわりに、俺と白峰が知り合ったのは中坊の頃だったんだけどな。

「もういい…今日は寝る…」

3対1の勝負に敗れた俺は、とっとと自分の部屋に引っ込むことに

した。

幸い今日は腹も減ってないしな。

俺と白峰が知り合ったのは…中二の頃だったか？

同級生だったらしいんだけど、俺もあいつも全く互いを知らなかった。

知り合ったきつかけつてのも、野犬に襲われてたあいつを俺が助けたっただけのこと。

野犬はなかなか手強かったんだけどな。

んで、駆けつけてきた白峰の親から俺の家族とのつながりを聞いた。その日からだ。あいつが妙に俺に絡んでくるようになったのは。

(あんどき助けなきゃ良かったか…ってそういうわけにもいかなかったしな…)

後悔しても遅い。つか後悔の余地がねえ。

もう今日は、全部忘れて寝よう……

「おいでなさい……」

またあんたかよ……。

「私はあなたに問う…試されし者よ……」
だからワケわからねえって。

「あなたは守りたいですか…或いは壊したいですか…」

「始まりの時は近い……」

今度は、もう…起きねえぞ……。

第四話

「ん…もう朝か…」

今日は何とか起きれたな。

またワケのわからねえ夢見ちまったが。

「あら流、今日は起きるの早いわね。朝御飯出来てるわよ。」

「兄貴おはよう。」

「ああ…おはよう。」

父さんは朝仕事が早えから、俺が起きる頃には大体出ちまってて此処には居ない。

「ごちそうさま…。」

大きな欠伸をもらしながら支度を終わると、俺は家を出た。

「あつ、おはよう流。」

白峰だ。あいつ曰くいつもの場所　近くの交差点で待ち伏せてやがる。

「はあ…。」

俺は溜息をもらしながらも、足を早めて前を通り過ぎようとする。

「あつ、無視しないでよ。」

白峰が追いかけてくるが、無視。

「起きろー！」

「!?!」

し、信じられねえ。バグで後頭部殴りつけやがった。

某野球監督（外国人）の優勝時の一言にインパクトが劣ってねえ。

「おまつ、無視されたからって殴ることだねーだろ！」

「あ、起きてたんだ。てつきり寝たまま歩いてるのかと思っちゃった。」

(笑いながら言うたつての！)

「だって、流があたしを無視するわけないもんね。」

「それはどっから来る自信だよ。」

「えーと、それはまあ…アレよアレ。」

アレって何だ…って聞く気力も失せてきた。

結局こいつと行くことになっちまったしな。

「流、なんだか今日元気ないね。何かあった？」

「何もねーよ。多少夢見が悪かったただけだ。」

「ふーん。どんな夢？」

「…お前に教える必要性が見当たらねえ。よってその質問は却下する。」

「いいじゃーん。教えてくれたつてさ。」

「面倒くせえ。」

「大した手間じゃないでしょ。」

「教えたくなーもんは教えたくなーんだよ。」

大体あんな夢を他人に話す奴なんかいるか？冷やかされるのがオチだ。

俺が再三拒絶していると、ようやく白峰も諦めたらしい。

「今度気が抜けてるときに聞き出してやる。」

などと言いながら怒っている。

ん、そうこうしてる間に校門が見えてきた。

教頭が「朝のニッコリあいさつ運動」なる無駄なことをやってるなあんなんにニッコリされても嬉しくも何ともねーつつの。

「そーいえばさ、うちの学校つて校長が行方不明だよな。」

「いや…行方不明つてか見たことないだけだろ。」

行方不明だと何か事件に巻き込まれたみてーじゃねーか。

「お父さんに聞いても『おられることはおられるぞ』って笑つばっ

かだし」

「なんか事情があるんじゃないの？それに大して困ってもないから構わねえしな。」

俺は校門をくぐると、校舎へと足を向けた。

さーで、今日も一日暇（授業中の）を潰すとするか。

第五話

どもっ！楓でっす！

今日も今日とて流と下校しようとしてるんだけど、

流は授業が終わると同時にプイツといなくなっちゃいました。

え？何で一緒に帰りたがるのかって？それは秘密です。（笑）

「どこ行っちゃったのかな？あいつ。」

下校ルートを歩き回っても見つからないよ。

もしかしてもう帰っちゃったとか？とか思ってたら、

いた、いましたあんなところに！帰り道に全然関係ない曲がり角を
曲がろうとしているのが

見える！

「流〜！」

叫んでも声が届いてないみたい。追いかけなきゃ！

流はどんどん歩いて行っちゃう。あたしが曲がり角を曲がると、流
は次の曲がり角を
曲がろうとしてしまってる。

もしかや遊ばれてる？そう思いながら角を曲がったとき、あたしは流
の姿を見失ってしまった。

「え…どこ!？」

見回すと、そこはあたしが全く知らない場所だった。

段々辺りも暗くなってきた。

（こ、こんなところで迷ったら…。）

それこそ「迷子」になっちゃおう！

とりあえず一番近い角を曲がると、そこは家と家に挟まれた、狭く
て急な坂になってた。

おまけに日が当たらないせいかジメジメしてる。

「あ……」

足跡がある！きつと流のだ！

あたしは元気を取り戻すと、坂を登り始める。

「ふう……疲れた……」

何とか登り切ると、家と家の間を抜ける。

「わ……」

あたしは思わず声を発した。

坂の上は意外にも開けていて、小高い丘のような場所になった。

そこにはたくさん草花が咲いていて、とても綺麗。

「ん……？白峰！？」

「！？」

声の方向をみると、流がその草花に埋まるようにして寝てた！

「びっ……びっくりしたなあ……」

「それはこっちのセリフだったの！」

流は起きあがると、あたしを睨み付ける。

「つけてきたのか？」

「や……一緒に帰ろうと思って……」

「……はあ。」

溜め息つかれちゃった。

「りゅ、流こそこんなところで何してるの？」

「……」

無言で上を指さす流。見上げると、たくさん光

「わ……」

あたしは再び声を上げた。

「星、見てたの？」

「いや、寝っころがってただけ。」

だよ。性格的に流がそんな趣味持つてゐるわけないし。

「わざわざ寝るためにここまでくるんだ。」

「いつも来てるワケじゃねーよ。たまに来るだけだ。」

「ふん…」

珍しく流がまともに質問に答えてくれる。

そのことが、ちょっと嬉しかった。

その日は流に家まで送ってもらった。（道分らないしね。）

父さんも母さんも心配してたけど、あたしが流と帰ってくると安堵の表情を浮かべてた。

（流は何故だか憂鬱そうだったけど）

一日が終わり、あたしは眠りにつく。

そしてまた、いつもの夢が始まる。

第六話

白峰にあの場所がバレちまってから二日後。

「今日もすぐ帰りたい気分じゃねーな…。」

俺は授業が終わると、家に帰らずにそこに向かった。

「ここを曲がれば、ってこいつは…。」

目的地目の坂。そこに一人分の足跡がある。

嫌な予感が…。

「あ、流お先〜。」

「はあ…。」

やっぱな。何故かしら俺が行くことを読まれてやがったか。

この前来たときに道順もしっかり覚えられたらしい。

「酷いな〜いきなり溜め息。」

「つきたくもなるっての…。」

こいつは帰れと言っても帰らないだろう。

仕方がねーな、多少うるさくはなるが我慢してやるか。

俺は白峰から少し離れたところに寝っころがる。

「よく寝るね〜、身長伸ばしたいの?」

「んなもん特に欲しいとも思わねーよ。寝てると楽なだけだ。」

近頃は楽でもねーけどな…迷惑な夢のせいで。

「楽か〜。…流ってさ、夢見る方?」

心読んだみてーなタイミングだな。

「あんま見ねーよ。寝つきが良いらしくてな。」

本当のことは言わねー。これだから俺は母さん達に「素直じゃない」
って言われるんだけどな。

「そっか…あたしはさ、最近おんなじのをよく見るんだ。」
へえ、こいつもか。奇遇だな。

「毎回同じ夢か？」

「うん。しかもそれがさ…。」

白峰は少し顔色を暗くした。

「…お姉ちゃんに呼ばれてる夢なんだよね。」

（お姉ちゃん？）

ちよつと待て、こいつの姉は…。

「お前の姉って…。」

「…死んじゃってるよ。3年前に。」

そうだ。こいつの姉は死んじまつてる。

二十歳を越えたばかりで、何かの研究者だったらしい。

こいつの父親…宗太も働いている勤め先で起こった事故で死んだって聞いた。

俺も父さんと母さんと葬式に行ったんだ。

名前は…銀杏だったか？

「お姉ちゃんがさ、あたしを呼んでるの。おいで…ってさ。」

「……」

まるで幽霊みたいだな。なんてことを口に出すほど俺は空気の読めない奴じゃない。

とりあえず無言でやり過ごしてみる。

「あたしもその時のこと詳しくは聞いてないけどさ、怖かったからでも夢に出て来るくらいだから、きつとすごく無念だったんだなっつて。」

「…で、寂しいからお前を呼んでるってか？」

あ、言っちゃまった。

「あはは、そうだとしてもあたしはまだ行きたくないな。」
少し笑いながら白峰は答えた。

そりゃ自ら望んで死ぬ奴なんて殆ど居ないだろうしな。

「…まあそんな夢。ごめんね、空気重くしちゃって。」

「謝らなくてもいいっての。それに、少しはお前も気が楽になった
だろ?」

俺にしては気の利いたセリフのつもりだ。

「うん…結構楽になったと思う。少なくとも一人で考えてるときよ
りはずっと。」

ようやく白峰が顔色を明るくすると、微笑みながら俺にこう言った。

「ありがとう、流。」

「……」

不覚だ。一生の。俺は一瞬、その笑顔に見惚れちゃった。

「やだな、注視しないでよね。」

「ち、注視なんかしてねーよ。」

照れ隠しに背を向けると、

「もう暗えからそろそろ帰るぞ!」と言って立ち上がる。

が、背後で白峰が立ち上がる気配が全くない。

「おい白峰……。」

多少イライラしながら振り返った、俺の目に映ったのは、
白峰がゆっくりと、草の上に倒れていくところだった。

第七話

時間が止まったかのように見えた。
風になびく草。瞬く星。流れる雲。
そして、『ドサツ』、という音と共に倒れる白峰。

「白峰!!」

一瞬の後、我を取り戻した俺は、倒れた白峰を抱き起こした。

「おい!しつかりしろ!」

駄目だ、完全に氣い失ってやがる!

『ズキンッ』

「ぐっ!」

突如、俺の頭に激痛が走る。

視界が霞んできた。

そして聞こえてくるのは、あの声。

「おいでなさい…」

「あんたは…っ!白…」

だが俺のその言葉は、数人の男達の足音や話し声によってかき消される。

「反応が強すぎたらしい…」

「この子が対象者か?」

「そうだ、専…いや、例のところに運べ。」

白峰をどこかに連れていこうしてやがる。

「あんたら、白峰をどこに…!」

問い質そうとする俺の腹に、男の一人が拳をつき入れた。

「っ…!」

意識が、遠のいていく…。

自宅のベッドの上で、俺は目を覚ました。
心配そうな母さんの顔が目に入る。

「っ……！」

まだ殴られた腹が痛む……！白峰は！？

「母さっ……！」

「大丈夫流？あなた、昨日の夜家の前で倒れてたのよ。」
もう一日経ってるってのか！

「母さん！白峰は！？」

「楓ちゃん？さあ……。何かあったの？」

何も……知らない！？じゃああいつは……。

「ぐっ……！」

「駄目よ、まだ起きたら！相当強くお腹を打ったみたいよ。」

「平気だよ……それより出掛けてくる……。」

俺は母さんを振りきって家を出ると、白峰の家に向かう。

あいつの家に着くと、すぐにインターホンを鳴らす。

「ピンポン」「ピンポン」「ピンポン」

出ねえ！くそ、どうなって……。

「あ……流君……？」

「白峰の母さん！」

白峰の母さん……紅葉が、どこからか帰ってきた。

俺はすぐに聞いてみる。

「すみません、白峰は……。」

「流君……楓はね……。」

第八話

白峰が突然意識を失った日から、もう一週間が経った。

俺が次に白峰を見たのは、あの日の翌日。

あいつの母さんに連れられて向かった場所…デケエ病院の精神科。そこで会った白峰は…。

「あ…おはようお母さん。…？あなたは…誰？」

…担当の医者の話は、

「記憶障害」と「精神に何らかの大きなショック」ぐらいしか聞こえなかったよ。

そんだけ俺も…ワケが分からなかった。

後で白峰母から聞いた話では、あいつもあの日の夜、家の前で倒れてたらしい。

目を覚ましたとき、既にあいつの記憶は失われてた。

これからあいつは色々と検査か何かをしなきゃいけないらしくて、基本面会謝絶になっちまうそうだ。

それから六日間。

俺は端から見れば、いつもと変わらない生活を過ごした。

でも、俺自身はいつも感じてた。

今までと違う、何かが無くなったような、抜け落ちたような空白感。そう。

やっと気づいたのは、俺の生活における、白峰の存在の大きさだった。

朝家を出ても、あいつが俺を呼ぶ声が聞こえない。

放課後の帰り道、あいつが俺に話しかける声が聞こえないんだ。

挙げればもつとある。

休み時間、ノートを貸してくれとせがむ声。

夕方、飯を食べに来ないかと誘う声。

突然電話をかけてきて、愚痴を聞いてくれと言う不満そうな声。

毎日感じてた、あいつの存在。

そして無くしてから気がついた、大切な存在。

好きとかそういうもんじゃねーけど、失いたくない、大事なもんだ
ったって事が、

今、俺の中ではつきりしてる。

だから俺は、今、この瞬間に決めた。

どうしたらいいのか、なんて分からねえ。

どれぐらい時間がかかるか、なんて分からねえ。

俺がやらなくちゃいけない、って責任があるとも思わねえ。

英雄気取りか、って馬鹿にされても構わねえよ。

俺は…白、いや、”楓”の記憶を、取り戻す。

身勝手な願いかもしれねえけど、

もう一度、あの声を聞きたいんだ。

もう一度、あの存在を感じたいんだ。

あいつの記憶を取り戻す唯一の手がかり。

いや、手がかりっていえるほど確かなもんじゃない。

それは…”夢”。

あいつの夢…もしくは俺の夢。

あの日、あいつから話を聞いて、俺は直感した。

多分、あいつが見ていた夢は、俺が見ていた夢と同じだ。

俺はあいつの姉の声を正確に覚えちゃいない。

でも、どっかで聞いたことがあるような気がしたのは確か。

呼ばれてるって所も一致してるしな。

いつも元気だった楓：風邪ひいたことなんて多分無かった。
いつも笑ってた楓：落ち込んでる姿は見たことがない。
そんなあいつが、夢の話をしたときはすごく悲しい顔をしていた。
そして記憶喪失。

俺にはそれが、あの夢のせいだとしか思えねえんだ。
だから俺は、夢の謎を解く。
必ず、取り戻してみせる！

薄暗い部屋。

モニターの放つ光以外、明かりのない部屋。

そこで二人の人間が、囁き合うような声で話していた。

「彼女”は…?”

「…もうすぐ…目覚めます…。」

「…そうか…ようやくだな…ようやく、始まる…。」

「はい…、…様。」

第八話（後書き）

一応これでこの小説の前半部分が終了です。
今後の展開も温かく見守っていただければ、と思います。

第九話

久しぶりだな、流だ。とりあえず近況報告するぞ。
最近の俺は、ほぼ毎日図書館に通ってる。

目的は…言わなくても大体想像つくだろうけどよ。

”夢”について調べてる。意味や言論、手がかりになりそうなもん全部な。

つつても、あんまはかどつちやいねーワケだが…。

「見つかんねーな…想定内だったけどよ。」

何しろ夢なんて不確かなもん調べてんだからな。多少のことはしょうがねー。

つか検索機能のついたPCぐらい置いとけよな。

「お…あつたあつた。」

ようやくそれっぽい本を見つけ、手を伸ばした瞬間。

「…！」視界にはいるもう一本の手。進む方向は俺と同じだ。

速度を速める俺と相手の手が、同時に終着点を掴む！

「…手を退かしてくれ。」

「アホ抜かせ、俺の方が早かっただろーが。」

「君の目は節穴なのか？氷渡。」

「生憎視力はAを飛び越えてSの域なんだよ、河中。」

この気に食わねー野郎は…同級生の河中治也だ。

何が気に食わねーって？雰囲気だよ雰囲気。

すげー暗さを感じさせる空気纏ってやがる。

後は身長だな。俺より5cmはデケエのが鼻につく。

何？ひがみつぽいって？べ、別に羨ましいなんて思ってるねーぞ！

「離せ、本が避けるぜ？」

「そのままお返しするよ。君が譲ればすむ話じゃないか。」
「そのまま返す。」

ラチがあかねーな。こうなりゃ”アレ”で決めるしかねーか。
俺が空いている腕を構えると、河中も手を伸ばしてくる。

「行くぜ？」

「…受けて立つよ。」

一瞬の沈黙。そして弾ける気合い。

「ジャンケン！」「あんたたちー！！！」

図書館外。

「はあ…。」

本GETならず。負けたワケじゃねーけどな。

「うるさい！」って掃除のおばちゃんに追い出されちまった。しば
らく出禁だなこりゃ。

後0.1秒で決着がついたってのに…嫌なタイミングだぜ。
しゃーねー。今日は大人しく帰ってとくか。

「ガチャ、キィ…バタン。」

無言で家のドアを開け、そして閉める。

靴を脱ぎ、二階へと上がる僕にかかる声。

「治也…帰ったの？」

「うん、ただいま母さん。」

一度足を止め、振り返ると疲れたような母の顔。

「今日は晩御飯いらないから…。」

「そう…わかつたわ。」

再び階段を上がり、自分の部屋に入ると、身を投げ出すようにベッ
ドに倒れ込む。

「しくじったな…今日は。」
おばさんに注意されてしまった。
これから入りにくくなったな…あの図書館。
氷渡のせいで、僕まで被害を被ってしまった。
人の事も知らないで…まったく。

「僕は…」銀杏”を助ける…。」
決意を言葉にして確かめると、僕は眠りへと落ちていった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2418c/>

Lose sight of road

2011年1月28日05時46分発行